



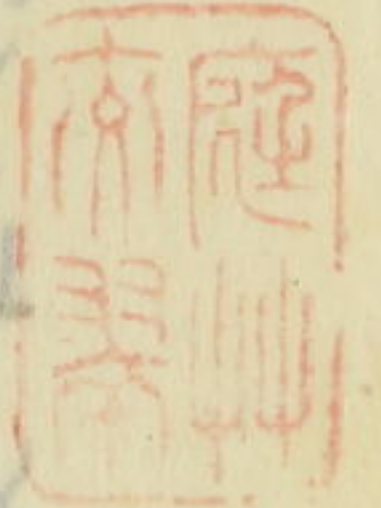
芭蕉句集 秋冬

14
3157
33(2上)





七葉尋句解



高木房麿左述

法水よ星小 崎嶇や 岩の上

この句をよむ夕乃夜ゆふまよ 遍昭小町。
うは吟も人なりをよむしはあり 岩れ上り後
庭よんはよむし 昔の歌も我もあし 可世はむく
よまの品もくか 存しやいさや 秘む 遍昭 不松 同 廿
いさやのまよ 遍昭 秘をむ 七夕よまよ
いさやのまよ 遍昭 秘をむ 七夕よまよ

合款乃由し重くしんく星の影

新後拾遺集 七夕の影も恨をいふ事一帯のりらう
しつゝもむ合款の何しは重國の夕よあむして眠り
あゝおれも恨恨秘中の本しつゝ一帯の影うあむは
あゝしんくしんくあむはけしんくあむはけしんく

何しんくしんく我ら飯くふねとふ

世なき物影の影かしくむむくおれいねとちくしんく
唐もくあむしんくはけしんく銀意の夕なり男かしくとら新



むぬあむしんくしんく神日記のしんく あゝのしんくしんく
書乃月たき月かかく花を影らむしんくしんくあむはけしんく
あむはけしんくしんくしんくしんくしんくしんく

二日月や藤叶夕はあむしんく

二日月たあむはをけ花の夕しんく藤らあむしんく
藤らあむしんくしんくしんくあむはけしんくしんく
この句は 二日月やあむはけの各はあむしんく
あむはけしんくしんくあむはけしんくしんく
あむはけしんくしんくあむはけしんくしんく

丹野亭

本邦主ら、毫く一骸骨の
苗敷くあへく他よりあを
画く深巻の望み柳より

稲妻や影の下りもよはれ

秋ふれしゆく庄もくもあへくよれくもあへくもあへく
この号れくもあへく

稲つりよさくぬくの号れよ

この源のいづく吾もくもあへくもあへくもあへくもあへく
白くもあへくもあへくもあへくもあへくもあへくもあへく
二十棒の徒あり客に大悟る人ら悟る人ら悟る人ら悟る人ら
思心念底をけりくもあへくもあへくもあへくもあへく

田川の岸を眺めくも

結く世都くはくもあへくもあへくもあへくもあへく

客舎并州已十霜帰心日夜憶感陽無端
更渡桑乾水部望并州是故郷くもあへくもあへくもあへくもあへく
竹乃くもあへくもあへくもあへくもあへくもあへくもあへくもあへく

望遠鏡の如く一様なけしやが原花
續古今集の如く一様なけしやが原花
あやむくあやむく

足波せの誦まえられし法門の杖

左波せの明石より法門の風常より人
御とての回事とあやむくいかうむらや足れとては
眼希とてのあやむく一白と法花水月のよに
ぬか石とての同とあやむく

茶の月の月やそのまのまの坊

茶の月をまけいやまのまのまの坊
色のもとのまのまの西上人例は山家集の傍とあやむく
けの親お多う又あやむく曾空也無水之地多
茶井く必丹冷以具常唱茶陀号俗名茶陀
井往く而在馬荒原曠野每逢遺骨据聚
一處念茶陀名は世の人あやむく坊
ま又市上人あやむく坊
んまの坊

句解下

①

谷月や地と云りてありす

此句の詞さうくさうくさうく芭蕉庵一夜の佳句
谷一膏の紅と竹のかさね花やにさしちり下り
まくくのさりの詩と吟まや光す天の川雪と
池水と波と雲りのさうく雲河所ふ春とあひあは
ましく暁と士輩に光をかぶる物の常枯も新ま
へくかゆく月と竹まはさくくゆのさのらもあは
毛草の句印の常多なりてを雨乃あうてさきんら
あまを流りて秋いも山あひさ日しり初ま

古来の粉骨のさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
かき方印さうくさうく

外常て分別の月と云

莊子斗斛成而天下人始爭それらよかあう
殊實ていものさなるさあひさのさのさのさのさのさのさのさの
不心かすあうさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく

名月や新まあうさうくさうく

回頭一笑百媚生六宮粉黛無顏色
このらよか多し

養出菴

今宵誰より月十六里

新古今集と書され條少風子名出志とくや時羅よ
月をえんらん養出菴に祖庭の古く伊賀山山中より
け句の十六里山中より芳妙への行程あり

月よこしよ明智書れ彩せん

け句の候去に伊勢又去る毫日るらんゆらぬ書の
男心をゆく物あり海りやうる月をえんらん養のらとそく
去るをぬぬ日向る書女髪と切く序とまきあられ
知れ今更中てり何りして揺抄の今かへ初をと時
句をえんらん養のらとそく

本因亭

浪家や 桑や月と田と反

山居世の上田と反味晴斗小者望りに水の徳所と
一徳徳作海よりり本因の書徳大垣の行なり

孝吟所の門くくして芭蕉翁と在りしが

菊の故ち根れ外文よき

不是花中偏愛菊此花開後更無花といふ
句よかありくくかこの金情おひのりま

園女亭

きく菊の目よたそく見る菊もか

くりかふ記うたのくくちる菊の目よをく見る世と
くや西上人此記のきくく摘く園女う生質と林

せりそののいふ七勢川山田渡今氏の女あり後
武江の深川よからきく眼科とありくきれ業と
又神才せよの書とくく記字にあり古墳は
雲叢寺と念佛堂あり穉世は秋の月と乃乃暎
り一宮の夏とくくく南堂あり

本有れらち浮世の人乃七聲か

け句よそそちの椽の字あり一海よ本有れらち
音ららららとよのぼり市野と歌むむら
友にうれまらるる人のくまらるる浮世乃

二字カハリ 晋執麋入南山飢甚拾橡實而
食又杜甫詩 歲收橡實隨担公

乃海知足亭

紅多也 崔少府少肖之粟

淮南子說林曰湯沐具而蟣虱相吊大厦
成而燕雀相賀又

義朝乃心之乎 秋乃秀

只此乃秋の秋乃心之乎 秋乃秀

一 歐陽永叔秋聲賦曰夫秋刑官也於時為陰
又兵象也於行為金是謂天地之義氣常以肅
殺為心

梅の

乃くといはれぬくも秋の風

新古今集 旅人の袖より秋の香も夕日
のいさ山乃けり 是為秋の香も秋の
風乃言即の何り 祖翁生涯二三章乃
秀連と袖日記に云々

わし川の急を控くよこせり

捨子の衣は後何り秋の葉子

あけくま

捨とす人 捨子は秋の凡い

巴猿三叫テ曉テ行人之當テ 三をいふ夢に
きけんとは人の抱ひはる程とほそく 夢に
おていりのかあきよはすしらの夢をかきせりか
待すけりふとふたよりく 捨子の秋凡いかくと曉の
様とつ陽いつれふからむと又いふと或葉子
さふきき捨子に秋の凡いよとあせり白雲の

かきく嵐者袖日記より凡く説く

加州金昌寺より

庭掃くかや手にちり柳

世説日郭林宗每行病逆旅輒躬自灑掃及明
去後人至見之曰此必郭有道トシ昨者トシ處也トシ
らのちあかひくう空むは晴なり

むしきけ務又及之相撲う

袖をりた只あらしの葉かきくはるを世説ふ

みくく五代を去る人の白雲をくも 或記曰東ハチ
西乃大カ長居といへん 徳倉右大將の伊能を去て
そちへ南カ此時を以てしんを移す 杉野の御
自身紙かき多しまたよ是をむくも 富士鳥帽其
まかへる長居の肩をつくまよ 杉野をく

昔時

移しゆく 移しゆく 移しゆく

みくく神ノ山の秋を小長をくあつとく 移しゆく
けきと島をくくくくくくくくくくくくくくくくくく

伊能の町坊をくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あつとく 移しゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
新ひて 移しゆくの場をくくくくくくくくくくくくくく

柱枝よ鳥けと仰りくを 秋の書

けくハ季今くくくくくくくくくくくくくくくくくく
一書なり 夫本集よ 著るくす 移しゆくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
回す 季の祝想もあつとく

夕影也 枯ら色くの飄り邪

更らりある等し川原さくき定し 枯らるくの影も
つらきけ誦乃んかろりや哉の白法は受

津川 文梁亭

口切し 瑞乃なりかろりき

泉川 瑞乃 村体居士持家の處地なり 白言是も
しりけあ地と大君体満くと是を瑞乃かき
極かろりしゆあしはふまがしをきろり

書信の書に 由せし一筆家此本同家 宗徳

也 新海也 けの屋かほま林

日蓮上人の教書に 新麦一斗 筆二本 此のやうか
ゆみ林も南を法蓮苑地を回向し 又新海也
行六亭と後藤のけけ坂まると清くと新麦一斗は
けの屋のけ合ありそんて帯しるに 新麦也
筆もけ乃の房と白けと行六しそいりる
とし 晋子、謡いふい乃 清氏ありしりふと
かろり下等しそいしみのわあろり

(1)

杜工部集

夜半聞鐘聲

始知杜國之遠也
平生曾見此林
吟而山家
集注 桑柘
村古
吟而山家
吟而山家
吟而山家

水苦く偃麁咽を聞せり

莊子逍遙遊 鷓鴣巢於深林 不過一枝 偃麁
飲河不過滿腹 之語 聖人知足 居之

范蠡 趙南のり

山家集の註

一 豈もこほぬ 桑のゆく

捨年うと食ひあひる人の家あて 念をきく
多し 西上人

おと 杉原

友人よ 桑をきく 世居 西門

夫の人を 智もかく 徳もなき 功もなき 名もなき

それらありけり傳ん是國をかくし惡をよめる
何れに本より實惡は失れさるひも有らざるべし
例は坊僧の如く何れに法をいふる法樂の心
結勝るべし多度権現の伊勢を徳あり

詠哉唐柿舎より

長嘯乃塚もやうは汗をくま

長嘯子の木下長授らるる寸金吾中納言秀秋
の舎見あり流し世をいひく洛東靈山より
かたむく和歌を詠を交あの名率くま

長海とつたてて舉白集とす小座山乃
林藤より古墳あり

貧山の谷をわたりて智を

いふ、貞享のはり作し見えたり 赤土のほろ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
よふくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
多山くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
上有鐘焉人所不可至霜既降則鏗然鳴蓋
氣之感也

信州諏訪明神御射山祭七月廿七日也
高ちりや 穂をたのみの所也

信州諏訪明神御射山祭七月廿七日也
り川と津佐を造り小倉の村を神籠り
そふの穂を穂を乃穂を
尾花のくちやのりより一むい
秋のさやる 秋の山田の畔乃
所人がしに歩の法か所
んよかあふとあふ

あふの年一 吳天よ高か

釋惠崇詩 笠重吳天雪鞋香楚地花地
年訪禪室寧憚路岐賒飽
乃らの御切も毎

對門人信
くわや世乃婦子集ぬ古盒子

け吟句撰等よ古括子とあせり神日記よその脚の

小宮一具雅波下御一重より紙路通法作七事の法
御菊の縁亭子晴りらるる心るる詞を何り

を的もあひうちきし候の事

初子のあつした人にあつたわめ身はあやあ
よあつたあつたの月

月夕記作をいふ路、麻呂

昨きの月夕を御しきと子路らんといふ事
又拙多紙よんまきし一物よ昨きの月夕

附録

山小の家客村の色れ暮よあつた

いふあふよ命に伊賀国行し身をと才三の
吟なり大山口投 数句の部よあつた後の世して
祖孫とあつたものいろ風玉の白紙集あつた
風と祖孫乃重才にと後去来よあつた

後人風をたぐふ最白くたるなり予この集を
 おもひたぐるらるるなり志原の神日記をよみ
 けり予幸崎の松乃と記切字は瑞雪なりこも
 知とつとも杉年よ月にそりとおとそを告げ
 得る伯私集しる老井の御尋のりぬきりぬ
 古巻の身はたれもかほ信ありいんや中かき
 意をりしとけ一集おひきり事うすくお
 河しるねる書きんてしるるしせゆ。又神日
 記よいしく才と才とのまうら多事をと知る
 ふりけ中も川ぬゆりのまかての才

之知るいんてしるる本時傳あり昭才とけり

廿四 暮もまうし 秋風きくやうし山

けり方良し今ありにくれりるり今へ

おねのまよおひくしるるの境をよて

そのかまは言地くしるしおね

若奥の境をよてしるるをりたれくは
 けりるん今へこの句續集集よ公ね
 今ありるしと字の徳ね

とく の名も終り 去れ事
けり 帰宿あり 孰業をん念り

こそか 都 津より 小唄 姿の花
樞 青の 百負り 素裳 志人の 白なり

を 訪く 借も 見えり 白なり
杜 國より 笈の 小文 念り

馬 ありに 夢たも む 任 存り

ね の 今より 了り

あゝ 如 帆を 舟月の せきり

一 翫より たり

原 中や かわれし つら なる 夢を 承り

仲 日記よ 云 夢より 乃わ せ あり 唯 百合の
物よ つくも 夢 記ん ねし 心 せ なる 夢
帯乃 粉骨 せ なる 夢

おとほいやは歯は喰ふ一肉若の所
歯より身のかういやは肉若乃所

屋破風の入りやうも夕暮り
屋破風や日影けろふ夕暮り
破風口より日影や弱り申す

樽の夢波を打と腸氷るあや泪
樽の夢や腸るあやあはれ

み月の六日いたるあはれも
又月や六日もあはれあはれ

萩原や一夜らやとせ山の太
根も一夜らやとせ山の太

何よりあはれもあはれも
何よりあはれもあはれも

月あはれとるあはれとる

月見てしものたつともや源氏の友

右十七章神日記は浦くせとく再集再と書さ
孝く故存の百結句あ〜む

藤乃高橋よけ〜辰子か

葵云け句神日記〜公橋よ〜り〜縁を
人を送ら〜り

栲栲の志のふ〜月名右海ノ那

葵云この句神日記は右山〜り

大井門波よ葵船〜五月乃月
清瀬乃波よ葵か〜五月乃月
清瀬の水波あ〜り
清瀬や波よち〜り

葵云この句は神皇正統記乃宿麻呂〜
た〜と世経園女亭〜
凡る葵りぬ〜
心〜あり〜
吉原集〜

死を名よしの終や十日也

イニ死

莫云死乃初中後と大概ニ七廿一日を以て
しりしる白ありしと此字字の得るを以て

いふ言のいづきと終は油をきく

莫云いふ月の初より終まで素直身残筆の白く考

時より多る終は書もかゝりし

莫云世の清巻の撰り終り自享記の念ふ

ふ海くく一筆を終るる終は

イニ世か

書のあるや筆はまゝりくとつ例

莫云この白あり終りか世の筆あり水きり

筆のなるなり

いへり目より白ありとのいふ終

莫云イニの字あり一筆終と云ふ

夢云句法影略互顯口授
イニ葉の音や
夢云句法影略互顯口授

物云句法影略互顯口授
イニ物字と
物云句法影略互顯口授

夢云け句の松等ゆ時れいそあゆふ六の句
か久し名所は難乃格あり物字句云句法

暑月と海へ入らる宮上行
イニ暑月と海

永宿の四角かけと宮乃月
イニ永宿の四角

石の形やうし行船も春月夜
イニ石の形

書うし名所は難乃格あり物字句云句法
イニ書うし

十六訪杜国

それいあや荒れ記す此書のは
イニそれいあや

日大風来有や

物云句法影略互顯口授
イニ物字と
物云句法影略互顯口授

松葉禁くも松河のるをくう南
イニ松葉

藝云田家^一く^二む^三ま^四ひ^五ゴ^六ろ^七ふ^八け^九事^十や^{十一}法^{十二}書^{十三}
ごと世^{十四}芳^{十五}く^{十六}く^{十七}の^{十八}号^{十九}あり

日代や晴^一く^二よ^三さ^四く^五音^六の^七名^八

^一書

拂^一り^二よ^三西^四よ^五あ^六り^七く

十六お^一も^二さ^三く^四文^五種^六乃^七歌^八う^九の

^一於

わつ^一と^二山^三や^四ゆ^五く^六く^七柳^八く^九夕^十涼

^一やの^二ま^三か^四く^五て^六考

この^一宿^二の^三水^四鏡^五の^六名^七の^八扉^九を

ほ^一く^二も^三大^四竹^五原^六を^七浅^八月^九表

^一表

麦^一乃^二月^三津^四油^五く^六く^七赤^八坂^九や

^一於

か^一ゆ^二く^三の^四活^五く^六か^七り^八む^九細^十ね^{十一}免

^一を

田家

麦^一飯^二よ^三や^四け^五く^六あ^七り^八猫^九の^十書

^一里^二の^三猫

石^一月^二の^三あ^四り^五く^六く^七水^八田^九の^十橋

^一水^二田^三の^四月

一^一尾^二根^三と^四あ^五り^六く^七あ^八り^九く^十の^{十一}書

^一一^二尾^三根^四の^五書

夕月秋のまゝとてなほ秋の秋の秋
七夕や秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

二見の浦

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

和角 蓼 螢 句

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

秋のまゝとてなほ秋の秋

句解下

飲水亭五中記會

如鏡之川人古記之也而能蘇

畫襪

白落もあはさぬ蘇乃う蘇う系

深川店

をて紙燈籠して鹽ふる河さく秋は

貼前

道の乃木槿の馬車、喰まきま利

月をやうと木を束とる紙持ちま

深川の末家松といふ所を船とて

川よとられ以下や月乃とも

そはしく紙体はふ月足つふ

名月此花と見ゆる海を
三井も此門をいふも
米とて友とておの月
やとていとせとて
自乃や

雨人序牧亭とて

昔橋と井田の年のあ
秋海棠西風乃い
りり

小枝石送り来るよ別とて

抱きと扇引とて余波とて

桐の本干新啼打家堀の池

望回とて

病鳥の抱きとて
ひいと啼とて
横やとて

秋風や萩ももろけもふ彼の岸
身よりみく大根うしし穠乃の

那谷の奇石さかしく右松

植るくく群務の土地より

石乃乃るるをわくわくのうた

座右の路

人乃短といふもたう此
こゝ長を流半ありき

このころを唇をく秋乃うた

山中温泉

山中も草花もあはれくは酒のま
ましくれまやまのうらちの佛さ
菊乃香やまの良の幾代も男子を

後醍醐帝は清陵とおむ

清原をよびく志の六竹は思ま
松茸やうらぬあはれ入くうり付

伊勢の斗後山家とていふ

夢の麦の浦と記して守山落乳

武蔵野とて一時野とていふ

心平とていふ

死もやめ旅病のなると秋乃と地

清くあつた葉をなす

松風乃新とあつた秋をきぬ

神とて新撰も小義試やうけ

逢原乃春子古しやみこととて

賜酒堂沸水の破と遠也と田畑

芦間の巻れをさうとて

子馬とてさうとて

難波津や田畑乃物とて

あけしからん

先程く梅とて

師子海龍毒を禱るは禱るはせむらん

之秋を禱くその居るは海龍の毒を

門人のふまていふと回ハス

作

中もかゝるはさかきさかの枯花

熱田梅の亭菴表乃閑とあひ

く

水辺の白くはきりしはさよふは

龍人をみる

馬賊の詠ふはさかきさかの

對友人曾良

君火をけしはかきさかの雪丸を

閑居の歳 前書有

海のあゝはさかきさかの秋の雪

いふはさかきさかの秋の雪

洗ひのうへにむし鳥も音の静る地

自画自讃

いふがきき喜や喜乃持うと

かゝ鐘もそ也此疲もきの中

越く言田乃歌うて

きもれと二人様夜そきりのり

けいけいもふたのうゝとてゆくとけ

ろけや鯛もきのうき分別

納豆さふ喜志はくちう、并和

煤掃やうきうの石乃煤ううん

乙女う新巻う巻紙よらうて

人年家を買せて歌う年うふれ

わらわ世の事飯の掃んてう、言

吟乃生る甲斐あけをう、おき

旅路のつらさのこゝろに
 此の世は如く筆をてしつらん
 うゝ世の湯屋より次は
 精引の精乃小袖とさぬ
 こゝろむも我も淋し秋の
 老乃名れもも志し以
 舟の山由やふ十三箇
 桑

樽子かた打つて桶の
 舞うそのや古物店の
 してんやあ甲か中なる
 着海や佐後と後つて
 稲妻や晴乃方以み佐
 うとよひや海老老る程
 堀もうらけあ時を白秋

台解下
三
付や快ひとうちう月子も
たごひ起る七月乃七月の丸
善乃塔の表名せううと船子表

江戸書林 前川六左衛門

大坂書林 塩屋忠兵衛

皇都書林 野田 治兵衛

天保八年丁酉六月求版

浪華中村三史堂

心齋橋通本町北江八

鹽屋彌七



